



鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第30号

2007年11月1日

定例研究会は社叢学会活動の柱

多彩な話題と講師で社叢の豊かさを学ぶ

本部（京都）と関東・中部・福岡県支部で開催

社叢学会では発足当初より、定例研究会の開催を活動の重要な柱の一つとしている。現在、本部（京都）のほか、関東支部、中部支部、福岡県支部でそれぞれ実施しており、毎回、多彩な話題で社叢のもつ新たな可能性や問題点を認識する格好の機会となっている。また、狭い分野に閉じこもりがちな諸学会にあって、発足の主意である“諸学を結集してその（=社叢）解明を進める”（趣意書）ことが実現される場として、社叢学会の特色が最も現れる場だと言えよう。

関西定例研究会は、原則として奇数月の第4土曜日の午後で開催され、次回（11月24日開催）で28回目となる。関西在住の理事が回り持ちで話題提供者、コメンテータを選定し、理科系の発表に対して、文系の研究者から新たな視点での問題提起や問題解明のヒントが出されるなど、まさに学際的な議論の場となっている。また若手研究者の発表の場ともなっており、その分野の権威でもある理事などから示唆を得るなど、発表者にとっても得がたい機会となっている。

関東定例研究会は偶数月の土曜日午後に関西学院大学で開催されており、こちらも次回（12月15日開催）で28回目となる。ここでは社叢のみならず森林全体や、都市整備など、より広範なテーマが取り上げられている。毎年8月には社叢見学会を実施してきたが、今年は6月に日光東照宮の社叢と杉並木の見学を兼ねた宿泊研究会を開催、夜にはアルコールも加わって、よりいっそう活発な議論が交わされたようだ。

2004年に設立された中部支部では、第1回（2004年8月）以来、一貫して中部地方の各神社を訪れ、それぞれの社叢を実際に体感した上で、問題点や今後のあり方などについて、各神社の宮司をはじめ

め、地域の街づくり関係者などから話を聞いている。毎回の研究会がちょっとした遠足気分、6月には木曾御嶽山を訪れ、研究会とともに、木曾温泉での宿泊、エクスカージョンなども企画された。こうした活動が功を奏し、中部地方在住の会員数が急速に増加している。

昨年発足した福岡県支部でも、徐々に研究会活動が著についている。この地域の会員数が少ないことから、研究会は広く市民に開かれた市民講座として行われており、7月の第2回講座には70人も市民が聴講した。

今後、これらの地域での研究会をさらに充実した内容にしていくと同時に、現在、開催されていない地域でも、在住の会員等と協力しながら研究会の実現をめざし、少しでも多くの人々に社叢の多彩な魅力と重要性を伝えていきたいと考えている。



第2回福岡県支部定例研究会（於：太宰府天満宮）



ナギの雄と雌の話

話題提供 名波 哲 (大阪市立大学理学研究科講師・社叢学会正会員)
 コメンテータ 山倉 拓夫 (大阪市立大学理学研究科教授・社叢学会理事)

御蓋山のナギ林

春日山には1991年に始めて調査に入り、以後、天然記念物である御蓋山のナギ林を見続けている。御蓋山のナギ林は、奈良公園の東に位置し、春日山照葉樹林(特別天然記念物)に隣接、日本シカ(天然記念物)の生息地に含まれている。このナギは自生ではなく、西暦800年代に神木として献木されたのが始めだろうと言われている。御蓋山ではナギが優先種で、濃い緑色を呈しており、シイやカシが優先種である春日山などとは植生の違いが肉眼でわかる。ナギは、葉の形状からは意外に思われるが、針葉樹で雌雄異株の植物である。雄花は穂状で、雌花には直径が1.5~2mmのきれいな球果が実る。

御蓋山北西斜面に幅40m、長さ370m(約1.5h)の調査域を設け、胸高直径5cm以上のナギの位置とサイズを記録し、性の判断と繁殖状況、さらに生存と死亡状況を追跡(92~98年)した。また、40m四方の調査区では全個体について位置とサイズを記録した。

ナギとイヌガシ

御蓋山の種組成であるが、胸高直径5cm以上(3,157本)ではナギ(40.7%)とイヌガシ(51.7%)で90%以上を占めている。これは両者ともに科学的物質を持っているために、シカの食害にあわないからだと思われる。さらに全木調査区域(7,225本)では実に79%がナギで占められていることがわかった。イヌガシ(15%強)と合わせると95%近くがこの2種であるが、ナギもイヌガシも共にシカの食害に会わず、耐陰性については両者とも高いという、ほぼ同様の条件であるにもかかわらず、実生を含めるとナギが勝っていたのに、胸高直径5cm以上に成長した時に、イヌガシがナギを上回るのはなぜかという疑問が生じる。

この疑問を解くカギは両者の種子の形状にあると思われる。植物が移動するチャンスは種が飛ぶ時に限られているが、ナギは球果が大きいので、飛ぶ力はなく、真下にぽとりと落ちる。ところが雌雄異株であるために、もっぱら雌株の下に種子が散布されることになり、近くに雄株があれば、これらの実生が成長した時に種子をつけることができるが、そうでなければこれらの株は種子をつけられない。

これに対してイヌガシは種子に果肉がついており、これを鳥が食べることによって広範囲に運ばれる。雌株に強い縛りを受けるナギとは違い、分散のステージではイヌガシがナギに勝るといえる。ナギの密度の高いところではイヌガシは負けるが、雄株の下やナギのないところに鳥の力をかりて種子が飛び込むことによって、種の維持ができていないのではないだろうか。

実際に1m四方にいくつのナギの種が落ちているかを調べると、直下が最大で150個もの種子が認められたが、離れるに従って急速に減少し、6~7m離れてしまうとほとんどなくなってしまふ。そしてサイズの

小さい個体は雌株の下に強い集中分布が認められるが、成長するにつれて集中度が減っていく。これは高密度では死にやすいからであると考えられる。

これに対してイヌガシは、鳥によって広く種子が散布されるために、ナギの密度の低いところで集団を維持しており、ナギとイヌガシは無関係に分布しているといえる。ナギの雄株の近くに大きく育ったイヌガシが見られるのは、種子を作らないオスが周囲に空き地を作っているからである。

ナギは林地を独占しているか?

ナギの雌雄の比率であるが、胸高直径20cm以下では未開花個体が多く、成熟に時間がかかることをうかがわせる。胸高直径20~50cmでは雌雄ほぼ半々になるが、20cm以下の開花個体と50cm以上では雄株が多く、特に50cm以上の巨木となると約7割が雄株である。これはナギの雄株が早熟で、かつ寿命が長いということの意味している。ナギ林の中には雌株が存在せず、雄株が固まっている集団があるが、この理由として個体間の競争に雌のほうが敏感であるとか、個体密度の高い場所では雌のほうが死亡しやすい、などという理由が考えられる。ナギの死亡率は大変低くデータを取りにくいので、ここでは成長量の大小を見ることにした。その結果、雄株は周囲の混み合い度に影響を受けないのに対して、雌株は混み合ったところでは成長量が減ることがわかった。

ナギの雄株の下でイヌガシが更新していること、ナギは種子散布距離が短く、種子散布をしない雄株の集中斑が生じることにより、ナギがイヌガシ等に場所を譲っていることなどから、ナギは林地を独占してはいないと言える。

危機に瀕する御蓋山のナギ林

従来、ナギ林の種子生産は2年周期を持っていたが、2002年の開花を最後に、以後ほとんど種子生産ができていない。これは雄花がまともに開花せず、花粉を出していないことに原因があると思われる。このままでは、10年後には御蓋山のナギ林が消滅することにもなりかねない。これが昨今問題になっている気候変動(=温暖化)の影響なのか、他に原因があるのかは解明できていないが、遺伝子レベルでの調査も含めてナギ林を襲ったこの危機の原因究明に力を注ぎ、後世にこのすばらしいナギ林を伝えていきたい。



正常な雄花(左)と縮れた雄花(右)
 撮影 塩見修平(大阪市立大学大学院理学研究科)



社叢空間を軸とした都市緑地の展開

講 師 藤田 直子 (東京大学大学院・農学生命科学研究科森林科学専攻・
リサーチフェロー 環境学博士(東京大学))
コメンタ 坂本 新太郎 (国際造園研究センター副理事長・社叢学会理事)

1. 経験から得た社叢の価値 世界を旅して

都市域拡大とともに緑地は減少し、環境が悪化してきている。それらの問題を解決すべく屋上緑化や再開発の土地活用等による緑化創出が流行となり、均一的に整備された緑は都市の景観の一要素となりつつある。一方で地形と緑地の偏在性が顕著である。この要因の一つに社叢の存在が挙げられる。本来的には自然の中に神を見出した神聖な森である。様々な国を旅する中で多様な環境に触れ、自然と人間の関わりに深く思いをよせ、日本の風土がもたらす自然観・信仰心の大切さを再発見してきた。時代の流れに即しつつ、森の国日本に相応しい自然と人間の共生を目指した景観を作っていくことが、全世界の抱える環境問題を解く鍵になるのではないかと考える。

2. 緑地に対する空間認識 文献分析を通して

都市の緑化を推進する上で社叢空間の持つ持続可能性は重大である。減少傾向にある社叢空間を維持する為には社叢空間を緑地として認識することが必要である。古今の文献検索を通して、日本人が抱えてきた神社の空間概念の変遷を検証した。“神社の屋外空間”を指して用いられる「社叢」「鎮守の森」「社寺林」の類義語を比較分析した結果、1970年代中頃から「社叢」「鎮守」「社寺」と「森」「林」が組み合わせられることが多くなり、緑地空間として科学的に扱われる傾向が出てきた。また「社叢」は自然や緑地といった概念を含む空間概念、「鎮守の森」は郷土性を含有するような自然的場所として神域に限らない広域的な空間概念、「社寺林」は明治期から大正期の政策における神社・寺院所有の森林の名称で経済的・機能的イメージを含む空間概念であることが明らかになった。

3. 社叢に関わる法制度上の認識 史跡名勝天然記念物保存法の成立過程の分析を通して

史跡名勝天然記念物保存法の成立において、社叢は神域を含む植生学上優れた森林として扱われ、保護の対象として当時の神社合祀令への反発の意味も込められ称された。しかし次第に原生林に順ずる森林かつ神社に所属するものを「社叢」として指すように変化して

いった。また社叢に対する白井光太郎の動きに着目し、当時の社叢に関わる学識者の認識や白井の役割が明らかになった。文化財保護行政の中で、時代を経るにつれ制度上単純に優れた「植物」が存在する場として位置付けられていった。

4. 都市緑地における社叢空間の分析 都市における神社の立地と地形との関係性

東京における神社・寺院・公園の立地比較および社叢と周辺の緑地の連担性に着目した配置特性に注目したところ、立地点の分布は神社・公園が分散傾向、寺院が凝集傾向であった。神社の立地は全域にわたりランダムに分布し寺院や公園に比べ地形との結びつきが強い。この事から神社は最も身近で地形の変化や自然性を考慮した緑地空間として、評価できる空間になり得る潜在的特性を持つ事が分かった。また連担性が高い社叢空間は地形が変局し且つ斜面地である、または地形が変局し且つ開けているという傾向があり、地域の基軸となり他の緑地との間で地形に沿ったユニットが形成されている。この事は都市の緑地の残存パターンを把握する上で有効であると同時に、新緑地を創造する際の指標としても有効であり、社叢空間は地形との相関が含有された緑地であるという事が推測できる。

5. まとめ及び今後の展望

社叢空間を緑地として捉えた概念整理と実態調査の複合的研究から、神社の屋外空間は緑地としての潜在性が非常に高いことが明らかになった。元来社叢は風土や歴史文化、日本特有の自然観などを内包している重要な空間である。またその立地条件から全ての地域において基軸となり緑地を創造する拠点として評価しうる。しかし都市部では境内地の減少が進んでいる。社叢を維持持続させるには、緑地として認識させていく努力と工夫が必要である。そこで現在海外に目を向け、信仰や価値観における人々の空間認識と緑地維持の関係を時空的に解明する比較研究に取り組み始めている。今後の発展的研究を通して自然と人間の営みの関係を再発見し、社叢空間を緑地保全に繋いでゆく可能性を模索したい。(文責:佐々木百合子)

次回予告【第28回関東定例研究会】

日 時: 12月15日(土) 14:00~16:30

場 所: 國學院大學渋谷キャンパス 120周年記念1号館4階 1402教室
(東京都渋谷区東4-10-28) (教室は変更の可能性あり)

テーマ: 社叢文化を軸としたマチづくりの構想

講 師: 園田 稔 (京都大学名誉教授・社叢学会副理事長)

なお当日13:00~13:40 同じ教室にて下記上映会を開催いたしますので併せてご参加ください。

「森に学ぶ・人・森を語る - C.メイザーとC.W.ニコルの映像書簡 -」(昭和聖徳記念財団

H6年制作・伊勢千年の森シンポジウム上映作品)

主催: 國學院大學現代G P環境教育プログラム 共催: 社叢学会



飛騨一宮水無神社の社叢について

話題提供 藤枝 和泉(水無神社宮司)・小野 栄市(元宮村村長)・
山腰 暁(一之宮桜を守る会)
コメンター 林 進(岐阜大学名誉教授・社叢学会副理事長)

今回は飛騨一宮水無(みなし)神社。神体山である位山(くらいやま、1529m)は中部日本の分水嶺の中心に位置する霊山で、745年山中の木で笏(しゃく)を作って献上したところ、朝廷はその美しさを褒めて、この木を「一位」と命名し、それ以来、歴代天皇の即位には、位山のイチイの木で謹製した御笏を水無神社から献上するのが慣例となっている。明治7年から10年までは、島崎藤村の父で『夜明け前』の主人公・青山半蔵のモデルとなった島崎正樹が宮司を務めていた。境内には左甚五郎の幼少期の作と伝えられる木造神馬もある。(全国一の宮めぐり(2004)学研より)

杉・檜を中心とする飛騨一宮水無神社の社叢は、緑地環境保全地区に指定されており、岐阜県自然環境保全条例により、建築・土地の改変・木竹の伐採には県知事の許可が必要となっている。東海北陸自動車道の延伸と高山インターの整備により、名古屋から車で2時間半。樹齢千年を越える名木臥龍桜のあるJR飛騨一之宮駅から徒歩数分。前日の大雨に洗われた後の快晴の清々しい拝殿での正式参拝の後、太い柱が並んだ華麗な回廊に驚きながら、会員や地元の方々の参加者約40名で、お話を拝聴した。初めに、藤枝宮司から平成2年の大嘗祭に献上された位山の一位笏が披露された。

水無神は古来から正しくは「ミナシ」と呼び、延喜式に既に「水無神」として記され、明治元年の神祇官による裁定でも、祭神の系統は定かではないとあったが呼称を認められた。鎌倉時代以降は時代の流れと共に、一宮水無大明神・水無大菩薩・水無皇太神宮・八幡宮などと呼ばれていたが、戦後の憲法改正により宗教法人「飛騨一宮水無神社」に定着した。

江戸時代の安永2年(1773)に、飛騨一円を巻き込む農民一揆・大原騒動の際に水無神社が大集会場となった。神職の山下和泉守正次と森伊勢守久右衛門が騒動に連座したことで疎にされた。代わりに信州松本から神主が招かれ、当時の国学思想に乗って両部神道を唯一神道に変えたために、阿弥陀堂・鐘堂・仁王門が撤去されてしまった。

明治維新によって27歳で初代高山県知事に任命された水戸藩出身の梅村速水は、急速な改革を推し進めたために騒動となり罷免され、29歳で東京で獄死している。その改革のために仏像や仏教関係の古文書が焼却された。明治5年の太政官布告では世襲神主・社家(毛利・藤枝・藤江)が廃され、戦後の神社制度の改正まで、官選の宮司が任命された。島崎藤

村の父正樹もその一人である。その間、旧神主・社家は権禰宜として仕え、戦後に現藤枝宮司が復活して現在に至っている。

昭和12年に国営事業として全社殿の造営が始まり、終戦まで続いた。終戦直前には、熱田神宮と伊勢神宮の疎開が検討され、昭和20年7月末から8月23日まで、熱田神宮が御動座されていた。もう少し戦争が長引けば、伊勢神宮も来ていた。社殿が荘厳な理由が理解できた。

昭和63年8月に宮谷右岸の護岸施設に亀裂・押し出し等の変状が幅約50mに認められ、国の補助もあり宮村を挙げて地すべり防止に取り組んだ。二百～三百年生の杉・檜が林立しており、樹木や土砂の荷重を減らす必要から、役場職員総動員で伐採・土砂の除去を行った。跡に桜を植えて、現在は元の緑の多い山に戻った。

平成2年11月の御大典に向けて、宗教法人水無神社からの笏の受取りは認められず、村で御笏献上委員会を結成して願い書を提出した。材の乾燥に1年が必要なため、平成元年には位山から「三ツ紐伐り」で切り出した。当時は過激派の襲撃も予想され、神社周囲を照明して24時間警護した。村長と宮司が東京へ御笏を持参する際も、駅や車内で警察の警護が付いた。帰りの警護は何もなく、東京駅で一杯飲んで帰郷した。

御笏にするためには百年生以上のイチイが必要で、位山には80haの原生林に周囲7mの二千年生のイチイもある。巨木・巨岩があり、尾根筋は神様の通る道として昔から守られてきた。穴の開いた木や曲った木も神様がいるとして切らなかつた。山の手入れが良く、平成16年の大水害にも流木が出なかつた。信仰に守られた飛騨一宮水無神社であった。

文責：岡村 穰





太郎坊阿賀神社の社叢について

話題提供 中村 弘澄(阿賀神社宮司)・山田 富二男(阿賀神社責任役員)・
西堀 茂平(元湖東町長・敬神講社役員)・熊木 喜一(清水・小脇
街づくり委員長)

コメンテーター 林 進(岐阜大学名誉教授)

村社として氏子が支えてきた勝運の神社

中部研究会は各地の社叢を訪ねている。会場の選定には、尾張一宮真清田神社宮司の飯田理事のご尽力により、比較的広い集会所を持つ社寺をお願いしている。今回は、滋賀県東近江市小脇(おわき)町にある太郎坊阿賀神社を訪れた。山腹にある参集殿直下まで車で行ける。急傾斜の石段を登った拝殿での恒例の正式参拝の後、「悪心ある者は岩に挟まれる」という夫婦岩の隙間を通して本殿を参拝した。満開のマメザクラを愛でながら石段の参道を廻って里山風景が残る近江平野の雨上がりの絶景をバックに写真を撮ったり、林進支部長の説明を聞きながら会場に戻った。

旧八日市市域は、平成17年2月に周辺の永源寺町・五個荘町・愛東町・湖東町と合併し東近江市となり、南部には緑あふれる布引丘陵が横たわり、北西～西部には標高200～300mの山が平野の中に浮かぶように点在し、美しい景観を形成している。鎮座地のある赤神(あかかみ)山(別名:太郎坊山)は岩石が露出した円錐形の山で、名神高速道路からも遠望できる。近くに織田信長が城を築いた安土山や戦国大名六角氏の本城があった織(きぬがさ)山(別名:観音寺山)がある。

正式名は阿賀神社、通称は太郎坊、最近では太郎坊阿賀神社と呼んでいる。神体山としての岩山への自然崇拜から始まり、急峻な山で修行する行者が増え、さらに不思議な力を持った修験者に信者がついて山が整備され、夫婦岩が開いてからは一般の人でも参拝できるようになり、岩山に社殿が建設されてきた。旧官国弊社でもなく、村社として氏子が支えてきた神社で、古文書などは残っていないが、神道を基に天台宗と修験道が交わる庶民信仰の場として参拝者が多いこともあり、神社本庁が神職の階位を規定する別表神社に昇格した。太郎坊山上には奥ッ磐座、2kmほど離れた舟岡山に辺(へ)ッ磐座があり、昔からの遥拝所として同名の阿賀神社がある。

元来、阿賀大神が祭神であったが、江戸から明治にかけて、日本書紀に載っている神の名をつけた。祭神は「正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊」(読み方省略)。天照皇大神の第一皇子で天孫ニニギ尊の父神。大変長い名

に「勝」の字が2つ入っていることから勝運の神社とされている。天照皇大神は第一皇子の「天忍穗耳尊」を寵愛して脇に抱えて育てたことから「小脇」の町名がある。昔から、敬神講という大きな信仰団体に支えられている。本殿まで742段の石段をお婆さんが「神様が上から引っ張ってくれるので苦ではない」と登ってくる。信仰の力を感じる。

近江守護四百年の歴史と信長の焼き討ち

近江源氏の嫡流である佐々木氏は、源頼朝の伊豆での平家打倒の挙兵を始め鎌倉幕府創設時に非常に貢献した。地域では佐々木氏の本拠地で、頼朝も投宿したという小脇館(おわきやかた)が発掘された。六角氏(佐々木氏の一族)の本城があった織山には星の流れを見て占った星座信仰の跡が残っている。地域の寺院は比叡山の末寺になっており、元亀年間の織田信長の焼き討ちにあって多くの僧坊が尽く消滅した。平成18年5月の宅地造成の際に、沢山の石地蔵が出てきた。

滋賀県には鎮守の森が多い

滋賀県にはどの村落にも神社があり、緑の島が浮かぶようになって見える。一人当たりの県民所得が全国3位の豊かな県として、地の利があり、便利な場所に工場を作ったが、良田が潰され、緑地がなくなってきた。また、近年の土地改良で、畦畔林(けいはんりん)がなくなって、風の向きが変わり、森が壊れてきている。平成の大合併もあり、市域が拡張しているが、森を拡張する都市計画が必要である。

太郎坊の社叢をまちづくりに生かす

昔は氏子が集まることも多かったが、任期1年の自治会では長期展望に立った街づくりができない。平成12年に6自治会が集まって「街づくり委員会」を作った。ハイキングコースの修理やサポート、ハイキングマップの作成や太郎坊駅前の公衆トイレや昔の松茸小屋を模した休憩所を整備した。小学校がマンモス化して、近くに新設校もできる。また、数年後には鈴鹿山脈を貫通するトンネルが完成する。阿賀神社には懐かしい千日大祭やお火焚大祭があり、昔の賑わいを取り戻したい。

文責:岡村 穰

社叢学会後援 シンポジウム 海辺の聖地と鎮守の杜

入場無料

日時・場所: 2007年11月10日(土) 13:00~17:00 出雲市立平田文化館 視聴覚ホール

基調講演: 海辺の聖地 上田 篤(社叢学会副理事長)

報 告: 鎮守の森の植物 松村 喜則(元島根大学助教授)・『出雲国風土記』にみる神祇祭祀の空間 錦田 剛志(社叢学会市民会員)・消えた縦縫の浜と里の祭り 西尾 良一(同)

申込み・問合せ: TEL・FAX 0853-62-5570 E-Mail seiryu@bird.ocn.ne.jp



大崎正治氏案内による
フィリピン先住民族マリコン村の
棚田交流見学ツアー

社叢学会員で國學院大學経済学部教授の大崎正治氏が25年以上にわたって交流を続けているフィリピン・ルソン島北部の先住民族の村マリコン村の、棚田を作り、守ることによって自立してきた文化を見学・体験するツアーの参加者を募集している。日程は2008年2月8日～2月15日。旅行費用は約10万2千円。定員は10人で、申込み締切は11月下旬(先着順)。詳細は大崎氏(Tel.080-5010-4541 E-Mail masaosak@kokugakuin.ac.jp)まで。

した時は、大変お手数ですが、事務局までご一報くださいますようお願いいたします。なお、12月末日までに入金の確認ができない場合は、以後、「鎮守の森だより」等の送付ができなくなりますので、悪しからずご了承下さい。

- 来年度の年次総会は出雲大社で開催の予定です。詳細は未定ですが、例年通りの会員による研究発表やシンポジウムに加えてエクスカーション等も企画したいと考えています。見学先のご希望等、事務局までお知らせ下さい。

編集後記

ほんの一言！ しか場所がないなあ。では、季節の話題で一言。と言えば食欲の秋！ 栗といえばモンブランでしょ、お芋はスイート・ポテトだし、りんごはアップルパイ！ スイーツどもが冬眠(ん!? 人間のくせにい?!)を前に皮下脂肪の蓄積にえらい協力的。。。協力的なのはスイーツだけではありませぬ！ も少し冷えてくると、いよいよお鍋の登場だもん(冬眠中でもご飯は食べるんです)。主役をはる蟹とか河豚とかは当然のことながら、脇役のお野菜も主役級の美味しさだしなあ。。。これじゃあ太るわ。(藤岡 郁)

事務局から

- 今年度の会費をまだ頂戴していない皆さまには振替用紙を同封いたしました。社叢学会は会費で運営しております。ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。すでにお支払い頂いているにもかかわらず振替用紙が入っていま

次回予告【第28回関西定例研究会】

日時：2007年11月24日(土) 13:30～15:30
 場所：伏見稻荷大社儀式殿(京都市伏見区藪之内町68 075-641-7331)
 テーマ：社叢林の種多様性に及ぼす小面積化の影響
 講師：石田 弘明(兵庫県立人と自然の博物館)
 コメンター：前迫 ゆり(社叢インストラクター・大阪産業大学人間環境学部教授)

掲 示 板

締切間近!! 『原稿募集!』

『社叢学研究』(第6巻)への投稿: 論文、研究ノート、資料紹介や調査報告(各400字詰原稿用紙40枚以内)と「鎮守の森の活動報告」(右記参照)を募集します。締め切りは、いずれも11月30日(金)必着。

「鎮守の森の活動報告」
 祭、音楽会、調査などの活動、抱える問題点などを1,200字程度でご報告下さい。手書きでも結構です。写真やイラストなどもお添え下さい。

* 書評欄では会員の皆さま方の著作を取り上げています。出版された方は、ぜひ、ご献本下さい。

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
 TEL 075-212-2973 FAX 075-212-2916
 URL <http://www2.odn.ne.jp/shasou/> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp
 社叢学会関東支部 〒101-0031 千代田区東神田1-8-11森波ビル2F
 TEL 03-5875-8423 FAX 03-5875-8321 E-Mail shasou@macrovision.co.jp